

蕾の悦虐（ロリマゾ） 4

# 強制入院マゾ馴致（後編）

絶海の孤島で繰り広げられる集団調教劇



濠門長恭

## 目次

|                         |         |
|-------------------------|---------|
| 主な登場人物 .....            | - 3 -   |
| 前編の粗筋 .....             | - 5 -   |
| 入院 5 日目：清掃奉仕 .....      | - 6 -   |
| 入院 6 日目：水泳療法 .....      | - 82 -  |
| 入院 7 日目：反復作業療法 .....    | - 110 - |
| 入院 8 日目：感覚遮断療法 .....    | - 137 - |
| 入院 9 日目：退院梱包 .....      | - 164 - |
| 入院 10 日目：キツネ狩り .....    | - 179 - |
| 入院 11 日目：ソープテクニック ..... | - 211 - |
| 入院 12 日目：強制絶頂療法 .....   | - 217 - |
| 入院 13 日目：再入院患者 .....    | - 221 - |
| 入院 14 日目：被虐開眼 .....     | - 244 - |
| 入院 15 日目：ビデオ撮影 .....    | - 256 - |
| 入院 16 日目：催眠暗示処置 .....   | - 268 - |
| 入院 17 日目：母娘狂艶 .....     | - 269 - |
| 退院の日：悦虐への期待 .....       | - 294 - |
| 後書き .....               | - 297 - |

## 主な登場人物

### 柴田英章

11年前に前妻と離婚。

銀行支店長。SMクリニック運営会員。

### 柴田（旧姓：増宮）花穂

女子短大を卒業してすぐ結婚。ひとり娘が2歳のときに夫と死別。夫の会社の元上司に飼育され、SMクリニックに入院させられる。飼い主に飽きられて柴田英章に譲渡された。昨年の秋に形式上の結婚をしたが、実質はマゾ牝奴隷。

### 増宮芽衣

年頃の女の子だからSEXにも興味津々だが、引っ込み思案で告られても「ごめんなさい」が先に立ってしまう。実父の記憶はまったく無い。

ロングヘア。数年後には母親譲りのナイスバディに成長しそうなプロポーション。今のところはぎりぎりCカップ。

マゾの素質に恵まれている。

### 大貫春香

5年前から、実父と日常的にSEXをしている。他の男や女、被虐にも悦びを見出したいと入院を志願。

院長

SM (Slave Making) クリニックのオーナー  
常勤スタッフ

タナカ ハヤシ ナカノ カンダ

ボランティア (3名～6名)

SMクリニック正会員。数日単位で入れ替わりがある。

看護婦

カズコ サヨコ アイコ

元入院患者が多い。本物の看護師もいる。

入院患者 (先輩)

幸恵

愛人契約に調教入院が含まれている。退院間近。

彩子

新婚旅行で連れて来られる。反抗的。

一樹

一家心中でひとり生き延びて、父親の取引先に引き取られる。ホモSEX拒絶で入院。退院間近。

里菜

名家の娘。不良。愛想尽かしをした親に送り込まれる。  
調教後はサディストに売られる予定。

入院患者 (後輩)

詩織

婚約者に連れて来られる。

純子

レズ矯正の名目。レズ行為自体が父親の仕掛けた罠。

他に、患者と接触しない一般人が若干名雇われている。

## 前編の粗筋

柴田芽衣は母の再婚相手に騙されて、孤島にあるSMクリニックに強制入院させられた。そこは、どんな女も（そして少年も）従順なマゾ牝奴隷に調教（嫌虐症と男性恐怖症の治療を）する施設だった。

ここでは、精神病治療の「行動療法」を模して、正しい行動には褒美（快感）を、間違った行動にはペナルティ（苦痛）を与えて、ついには悦虐に導くというシステムが採用されている。

初日のオリエンテーション・ビデオで、若き日の母親がモデルとして登場したことに、芽衣は衝撃を受ける。

入院二日目に芽衣は「破瓜療法」を施されて、すべての処女を破られた。

四日目にはマシンでGスポットのアクメも強制的に教えられて。

先輩患者や同時入院の春香とともに、常勤スタッフやボランティア（つまりSMクラブの客？）たちから苛酷な調教を受け続けている。

## 入院 5日目：清掃奉仕

けたたましいベルの音で目が覚めて、ナースさんに大の字拘束を解いてもらって。今日も、異常きわまりない日常が始まる。

今日は週に一度の剃毛の日だそうで、排泄の前に使い捨てのT字剃刀を支給されて、全員一斉に、シヨリシヨリシヨリ。

昨日の馬鹿げた運動会で、わたしの中のなにかが吹っ切れたように思う。しょせんは、サディストどもが一方的に決めたルールに従うしかないし、相撲で彩子さんをわざと負けさせたように、彼らが自分で決めたルールを破ったところで、わたしたちには抗議すら許されない。

でも、結果としては誰も骨折しなかったし、一樹くんも玉をつぶされずにすんだ。被虐に甘んじていれば、ぎりぎりのところで五体満足に生かしておいてもらえる。

ある意味、安逸な生き方かもしれない。赤点を取って落第することも、友達と仲違いして落ち込むことも、お金がなくなって飢え死にすることも、なにもかも心配しないですむ。性的虐待を受け容れて、人間としての尊厳とも捨て去れば――イジメを苦にして自殺することもない。

いや、違う！ そうじゃない！ そうじゃない！ そうじゃない……わたしの心の中の魂は、今も叫び続けている。でも、それをサディストどもに聞きつけられたら……極刑が待っている。具体的になにをされるのか、恐ろしくて想像すらできない。

恐怖が、じわじわと魂を押しつぶしにかかっている。

そんなことをぼんやり考えながらラジオ体操をして排泄をすませて、今朝はまたペットフードの犬食いに戻って。

午前中の嫌虐症治療が始まった。彩子さんと里菜さんは五階へ連れて行かれて、ボラン

ティアたちの個別治療。たぶん二対一だけど、あれだけ広いベッドなら窮屈じゃないと思う。

わたしと春香ちゃんは、リハビリルームで犬芸を仕込まれることになった。一樹くんが先輩としてお手本を見せてくれる。

「一樹。チンチン」

カンダのコマンドで、一樹くんが腰を落として上体を立てて、肘から先を前へ突き出す。全裸ってことを別にすれば、学校でふざけるレベルのお遊び。それだって、状況によってはイジメになるけど。

「これはポーズだけでいいぞ——マンマン」

両手を垂らして、脚をうんと開いて、股間を左右に引っ張る。玉袋を接着しただけの一本筋だから、もちろんなにも起きない。

「ヨシ」

一樹くんはノーマル状態の「オスワリ」ポーズに戻った。

「芽衣、春香。チンチン」

馬鹿らしいと思いながら、ちゃんとポーズ



をとった。馬鹿らしいことをさせられるのも、  
恥辱のひとつには違いない。

なのに、春香ちゃんたら。

「はっ、はっ、はっ」

口を開けて舌を突き出して。犬になり切っ  
てる。

「マンマン」

すでに羞恥心もすり切れかけている。淡々と小淫唇を左右に広げた。上から見下ろされても、そんなに奥までは見えていない――のが、せめてもの救い？

マングリ返しの「ゴロン」をしてから「マンマン」だって平気。小淫唇の中は、膣（正確には膣前庭）という名前の臓器。レントゲンで胃腸を見られたり、CTで輪切りにされたって、恥ずかしがる人なんかいない（とても思わなきゃ、やってられないわよ）。

とはいえ。他人に見られながらのオナニーとかSEXは、まだ恥ずかしい。

ディルドを床に立てての「オスワリ」。斜め

に固定しての「フセ」。これらには「ヘコヘコ」の追加コマンドがある。そして最終コマンドが「イケ」。これはちょっとだけ難しいけれど、前足を片方自由に動かしてもかまわないし、臆逝きでなくクリ逝きでも許してもらえる（ことが多いそうだ）。

いったい、こんなことを女の子にさせてなにが面白いんだらうかという芸もある。遠くへ投げらえたディルドを口に咥えて持ち帰る「トツテコイ」とか、宙で垂直に支えられたフラフープを飛び抜ける「ジャンプ」とか。ちっともエッチぼくない。

コマンドは、犬に覚えさせるよりたくさんある。ていうか、サディストがその場で思いつくものもすくなくない。それを人間の頭で判断（99%の場合、いちばん屈辱的な動作が正解）して、人形のように心を捨てて、犬のように忠実に実行しなければならない。

馬鹿馬鹿しい思いで、一時間ほどもあれこれ仕込まれてから。

「どうです。やってみませんか？」

リハビリルームの隅に置かれたソファにふんぞり返って、ちょっと退屈そうに見物しているVIPに、カンダが声をかけた。

「わしとしては、こういうお遊びは趣味じゃないがな」

この人と、初めて意見が一致した。

「しかし、芽衣はわしが道をつけてやった娘だ。最後まで面倒を見てやるか」

見てくれなくていい。

VIPがソファから立ち上がった。こいつ、またパンツも履かずにバスローブだけだ。でろんと垂れてるのが丸見え。

「春香。ゴロン」

春香ちゃんがあお向けに寝転がって、犬そっくりに手足を引きつける。

「芽衣。お回り」

四つん這いのまま、向きを変える。

「ストップ。ゴロン」

頭と足を春香ちゃんと逆にして、同じポー

ズになる。自分でやってみるとわかるけど、手足を引きつけてないと、好きにしてくれって不貞腐れてる印象を与える。

「ゴローン」

肩を蹴られて横向きになった。

春香ちゃんも反対から肩を蹴られて、わたしと向き合う。つるつるの股間が目の前にきた。剃ってるんじゃないくて未発毛だから、すぐくすくすしててる。

「春香、芽衣。ペロペロ」

それって、69をしろってこと？ しかも、女の子同士で。

まともな女の子なら、憤慨して断固拒否なんだろうけど。鞭も洗濯バサミもケツバットも、それ以上に絶対断固願い下げだから。

それに、レズってのは興味が無いこともない。ロリビッチがどれだけテクニシャンか、そしてどんな反応をするかも、自分で試してみたいという気持ちもある——と、自分を説得して。

たぶん叱られないだろうと判断して、両手を使うことにした。

春香ちゃんの上側の腿を持ち上げて、股間に顔を突っ込む。わたしも自発的に腿を開く。なんか、犬が寝転がっておしっこしてるみたいなポーズ？

脚を開かせちゃったから大淫唇もすこし開いて、はみ出しているちっちゃな具がはっきり見える。たしか、五日前には一本筋だったはず。経験を積んで成長（性長？）したのかな。だけど、五年も前から実の父親とSEXしてたはずだし……

「ひゃうっ……」

春香ちゃんに先制攻撃された。

生温かくて柔らかな「物」がクリトリスに触れるなんて、生まれて初めての体験。しかも、じんじん勃起しちゃってたから粘膜を直撃。

「あううううう……」

顎が震えるほど、鋭い大きな快感。頭の芯

まで痺れる。

「芽衣。ペロペロ」

はっと我に還って。小指の先くらいに大きくなってる目の前のクリトリスを、ペニスと同じ要領でぱくっと口に咥えた。覚えたばかりのバキュームフェラ。

じゅちゅううう……

「きゃはあああっ……あああんん！」

ソプラノよりも高い透き通った悲鳴。じゃなくて、嬌声だよね。

嬌声はすぐにやんで。

ずじゅう……びちやびちや……ちゅうう。

「ひゃあああっ……はああん」

わたしも甲高く啼いて、またすぐクリトリスを咥えて息を吸い込む。

「きゃああっ……んん」

じゅずうう……びちやびちや……

「あうううう……」

れろれろれろ……

啼くのとクンニするのと、口が二つほしい。

だけじゃない。牝穴もぐちゃぐちゃに掻きまわしてほしい……あれ？ 今、自分で牝穴なんて考えた。やっぱり調教の成果？

かまわない。こんなにすごい快感が得られるんなら、マゾ牝奴隷に堕ちたっていい。

「春香ちゃん……わたし、逝きそう」

「あたしも……お姉ちゃん、一緒に……」

「ストップ！」

やめろと言われたのは頭で理解したけど、身体が止まらない。あとで鞭百発の懲罰を受けてもいいから、逝かせてほしい。

春香ちゃんも同じ思いなんだろう。

わたしたちは快感にしがみつきながら、無我夢中で互いに相手のクリトリスを舐めて吸って……

「やめんか！」

バシッ……

「きゃああっ！」

「痛い！」

見上げると、VIPが鞭を手にしていた。

長い一本鞭。二人まとめて脇腹を叩かれたんだ。

「主人の命令も聞かずに逝き狂うとは、ビッチとしては上出来だが、奴隷としては最低だな。カンダくん、四日間も調教して、このザマか」

声は厳しく作ってるけど、顔が嗤ってる。懲罰の絶好の口実ができたから悦んでるんだ。

「はあ、申し訳ありません。トレーニングをやり直させますから」

カンダも嗤いながら、戸棚から真っ黒なディルドをふたつ取り出した。

「ええっ……！？」

春香ちゃんがひきつった声を漏らした。わたしも、恐怖でディルドから目をはなせない。

これまでに見たディルドのどれよりも太い。ひょっとして直径が五センチはあるかも。でも、こいつが凶悪なのは太さじゃない。カリクビから銀色の棘が突き出ている。

最初の日を思い出した。ボランティアの一



人が、似たようなリングを嵌めて彩子さんを犯した。あのときの彩子さんの凄絶な悲鳴。それを、今度はわたしと春香ちゃんが再現させられるんだ。それも、たぶん犯されるんじゃないなくて……

カンダが小さいけど重たそうな台を並べて、そこにディルドを取り付けた。

「芽衣、春香。コイ」

ううう。逝かせてもらえずに罰だけ受けるなんて惨め。虻蜂取らずなんて成句を思い出した。

ディルドの前でチンチンさせられて。

「オスワリ」

直径五センチに加えて、一センチの針。差し渡しは七センチにも達する。こんなのを挿入したら……裂ける！

だけど。わたしたちはマゾ『牝』奴隷だよ。いくらサディストでも、牝穴を破壊するようなことをするだろうか。それとも、裂けてから縫い合わせれば締りが良くなるのか？

サディストどもに慈悲心とか良識は期待するほうが間違ってる。でも、損得勘定はするに決まってる。それに――柴田は、まだわたしを抱いていない。女として使い物にならなくなった義理の娘とアナルSEXやフェラチオだけで満足するだろうか。

だいじょうぶ。痛いけれど壊れない。

そう心に念じて。わたしは一步前へ進んでディルドをまたいで。腰を落としていった。

69で股間はべちゃべちゃになってるから、先端はするっと割れ目を通過した。

「う……」

膣口がわずかに押し広げられた段階で、カリクビから突き出ている棘が小淫唇を内側へ押し込みにかかった。

両手で「マンマン」して、さらに腰を沈めて――棘が粘膜を引っ掻きながら奥へ進む。

「ぐうう……」

痛いけれど、肌を切り裂かれている感触はなかった。

手をかざしてみると、指に少し血が着いているけど、出血ってほどじゃない。

「ぐがああああ……」

いよいよ棘が膣口に達した。

「痛い痛い痛い痛い、痛いい……！」

股間全体が鋭い激痛の塊りと化して。もうどうにでもなれと。一気に膝の力を抜いた。

ザリザリザリッと内側を引っ搔かれて。

「ぎゃがわああああっ！」

絶叫したときには、お尻が台に乗っていた。

「だいじょうぶなの？」

春香ちゃんの声。自分のことに夢中で気がつかなかったけど、春香ちゃんはまだ中腰のまま、じっとわたし（の股間）を見つめていた。

「……裂けなかったみたい」

激痛は続いている。わたしは、そう答えるのがやっと。

「犬が人間の言葉をしゃべるんじゃない」

ビシッ、ビシッと、一本鞭がわたしと春香

ちゃんの腰を打ち据えた。

「ワン！」

犬の鳴き真似をするくらいに余裕を取り戻して。春香ちゃんも激痛に歯を食い縛りながら、ディルドの上に「オスワリ」をした。

「ぎびいゝいゝいゝいゝいゝいゝッ……！！」

ぺちゃっと台にお尻を落としたときは、涙で顔がぐしょぐしょになっていた。

「芽衣、春香。へこへこ」

まさかと思ってた命令。彩子さんのときも、無理矢理に一時間以上もピストンされてた。でも、彩子さんのは本物のペニスだから、このディルドより細い。しかも、カリクビのいちばん太いところじゃなくて、その後ろに嵌めたリングから棘が出ていた。

彩子さんが罰せられた行為を具体的には知らないけど、それよりも命令への不服従のほう、罪は重いんだ。

なので。激痛をこらえて、脂汗を全身から吹き出しながら、へこへこする。実際には、

へ、こ……へ、こ……がいいところ。

もしも「イケ」を命令されたら。こんな状況じゃ、クリを弄ろうが乳首をつまもうが、絶対に逝けっこない。そしたら、命令への不服従になるんだろうか。

——さすがに、VIPもそこまで残虐じゃなかった。二、三十回「へこへこ」したら、「ヨシ」と言ってくれた。

「犬芸訓練は、これで終わりだ。下で身体を洗ってこい」

カンダに言われて。わたしたちはスモックを持って全裸で広場の排泄場へ行った。

リハビリルームにもシャワーとトイレはあるけど、基本的にはボランティアとスタッフの専用。さもないと、特殊な治療（調教）の場に使われる。

「あれ、なにか仕掛けがあるんじゃないかな」

階段を降りながら、春香ちゃんがささやきかけてきた。

「針の先が丸められてるとか、実は体温で軟

らかくなるのか——そうじゃなかったら、無事でいられなかったと思うな」

ふううん。春香ちゃんて、けっこう冷静で頭も切れるんだ。それとも、わたしより五年も長いSEXの体験がものをいってるんだろ  
うか。

わたしは、あらためて股間をまさぐってみた。まだ、そこにぽっかり大きな穴が開いていて、膣全体がずきんずきん悲鳴を上げ続けているけど、指で探れば血がちょっぴり付着する程度で、滴ってはいない。

サディストたちを信頼したのは、間違っていないかったんだ。

お昼まで、小休止。わたしも春香ちゃんも硬いベッドに寝転がって時間をつぶした。ビデオを観る気にはなれない。さすがに、だいたいは観尽くしたし、それ以上に観たくない理由もある。観たくないというか、腰掛けたくないというか。

拘束具が装備された椅子に座って体重を掛

けないと、モニターの電源がはいらない。そして椅子には、今では二本のディルドが植え付けられている。これ以上牝穴（また考えちゃった。違う、『膣』なのよ）を虐められるのは厭だ。

でも、わたしはまだ甘やかされてるのかもしれない。ほかの人たちは――春香ちゃんも含めて、ディルドが『名器養成ギプス』になってるそう。一定の時間が経過する前に、ディルドを締めつけないと二本のディルドの間に高圧電流が流される。里菜さんは、小淫唇とクリトリスの間で通電される懲罰を受けたけど、それよりは痛くないとのこと。とはいけど、電撃は首輪で懲りている。

『名器養成ギプス』は飴と鞭になっている。決められた時間だけ締めつけていると、低周波が通電される。五分も続くとアクメに到達するって、これも里菜さんから聞いたんだけど、残念なことに（？）三分でスイッチが切れるとか。

わたしが免除されてるのは、まず拡張することが先決ってことかな。なんたって、非処女になってから三日しか経ってないもの。

でも……その三日間の体験って、ふつうの女の子の三年分以上はあると思う。

昼の食餌に集まったら、ボランティアの顔ぶれが変わっていた。わたしが入院させられたときから残っていた人を含めて三人がいなくなっていて、新しい人たちが一気に五人も増えていた。

ので（という接続詞が適当か疑問だけど）、ボランティアの人たちは、院長とスタッフがナースさんに餌をやるのを見学しながら食事をした。

ペットフードを犬食いしながら聞き耳を立てていると。ボランティアの人たちも、サディスト向けのオリエンテーションビデオを観るらしい。もちろん、椅子に拘束されたりはしない。ただし、人間椅子も使わない。マゾ



牝奴隷に観られてはまずい内容もあるんだろう——と、勝手に推測。

午後からは嫌虐症の集団治療として、患者全員で清掃奉仕。

わたしと春香ちゃんは、二階から四階までの床掃除。高手小手に緊縛されて、肛門にモップの柄を突っ込まれて。このモップは特注品なのか、S Mグッズのお店で売ってるのか。先端が直径四センチほどの球形になって、そこから細い柄が十五センチばかりあって、8の字を立体にした形状の膨らみがある。つまり、8の字のくびれた部分を肛門で挟み込むと、それ以上は奥に押し込まれないし、簡単には抜けない。これでお尻を突き出して後ろへ下がっていくと、床掃除になる。

もっと悲惨なのが彩子さんと里菜さん。縛られたりはしなかったけど、両手をグウに握ったまま袋をかぶせられた。

彩子さんは亀の子タワシを口に半分突っ込まれて、それでスタッフ用トイレの便器掃除。

便器に頭を突っ込まなきゃならないし、タワシが汚れてきたら、水道から水を流してそこに顔を突っ込んで洗うしかない。どうしても、汚水が口にはいっちゃう。

里菜さんはトイレの床掃除。セミロングの髪の毛全体に洗剤をぶっかけられて、それでゴシゴシ。入院してからの二か月間、リンスもブラッシングもさせてもらえず、パサパサのボロボロになってたけど、これは致命傷だと思う。中性洗剤だから髪の毛が溶けたり漂白はされないって院長は説明していたけど、そういう問題じゃない。

だけど。里菜さんは嫌虐症が完治したら、新しい御主人様に売り飛ばされるんだよね。商品価値が下がらないのかな。

一樹くんはとっくに嫌虐症と男性恐怖症は治ってたけど、最後まで残ってた御主人様への反感も、運動会（の罰ゲーム）をきっかけに克服して。もう厳しい治療は必要ないってことかな、わたしたちみたいには虐められな

かった。ナースさんたちに雑用を言いつけられて荷物を運んだり、排泄場の奥に作られてるマスからヘドロを掬い出したり。全裸でタックの一本筋を晒して軍手だけって格好に目をつむれば、まあふつうのお掃除かな。

広いフロアや廊下のモップ掃除は、そんなにつらくない（肛門を虐められるのにも、たいがい慣れてしまったもの！）けど、独房や食堂のテーブル下は痛い。テーブルの奥までモップを届かせるにはひざまずいて上体を倒さなければならないし、狭い場所では腰を振ってモップの向きを変える必要がある。そのたびに、肛門がグリグリえぐられる。テーブルやベッドの脚にモップがぶつかって、そのショックが伝わると……痛いけど気持ちいい。くそう。肛門を刺激されて感じるなんて……わたしの調教、どんどん進んでるよ。

そうこうしてるうちに、ちょっとだけ日が傾いてきて。時計がないから正確にはわからないし、主観的には何時間も経過した感じだ

けど。実際には午後三時くらいかな。もちろん、ティータイムなんてものはない。ボランティアの気分次第でザーメンタイムになることはあるけれど。

ボランティアの人たちはオリエンテーションも終わったらしく、わたしたちのエロチックで屈辱的な清掃奉仕を、ちょっとはなれたところから見物してる。この人たちも、じきに手取り足取り乳触りクリつまみ膣つきアナルくじりで手伝ってくれるようになるんだろう。なんて、精いっぱい明るく（??）考えながら腰を振ってた。

バタタタタタタタタタタ……

ヘリコプターの音が近づいてきて。やっぱり広場に着陸した。新しいボランティアの人たちが来たばかりなのに？

「ほう、あれがシオリか。いかにもお嬢様といった感じだな」

「●十歳で処女でしたな。今どき珍しい清纯派ですが……ああいうのは、案外あっさりと

マゾ 墮ちするんじゃないですか」

「しかし、モトダくんも断腸の思いだろうね。一千万の結納で釣った獲物のお食い初めをできないとはね」

清掃奉仕を見物していた新顔の二人が、好き勝手なことを言ってる。わたしたちを監督してるナカノはなにも言わない。

これまでの人たちは、他人のことをべらしやべったりしなかったけれど、別に個人情報保護とかは関係ないみたい。

ヘリコプターはじきに飛び去って。

わたしたちがまだ清掃奉仕を続けているとき。

「やめてください……歩きます。歩きますから……いやああっ……さわらないで！ トモヤさん、助けて！」

騒々しい声が聞こえてきた。さっきのヘリコプターで連れて来られたシオリさんだ。

「乱暴はしないでください。なぜ、こんなことをするんですか？ きゃあっ……変なこと

をしないでください」

これだけ元気がいいってことは、わたしみたいに脳電撃を受けてないんだ。あれがなかったら、わたしもシオリさんみたいに狂乱してたよね。

そのシオリさんが、カンダとタナカに両腕をつかまれて、そしてやっぱり乳房も掴まれて、引きずられてきた。

スモックも着てない全裸で（まだヘアの処理もされてない）、即席拘束されてる。つまり、首輪と後ろ手錠で、手錠の鎖は首輪で吊り上げられてる。これって、嚴重拘束と称する縄での緊縛より厳しい。でも、手っ取り早いから即席拘束なんだろう。

ちなみに、拘束の種類は軽いほうから順に、簡易、即席、標準、嚴重、鎮静、懲罰、重罰、究極となっている。鎮静から先は、行動の自由を完全に奪われる。五つの穴を刳った板枷に首も手も足も拘束されるのが、鎮静。懲罰となると、有刺鉄線で肩から太腿までぐるぐ

る巻きにされて、膝立ち姿勢で放置される。

有刺鉄線のぐるぐる巻きは、里菜さんと一樹くんが経験してるけど、そこから先の重罰と究極は経験者がいないのでわからない。先輩患者からの伝承も途絶えている。

「なに、この子たち……」

シオリさんがわたしたちに気づいて、棒立ちになった。

わたし、安心させてあげようと思ったのかな。それとも、これくらいで騒ぐなんて、だらしなと思ったのかな。お尻にモップを突き刺したまま、詩織さんに近づいた。

「わたし、芽衣といいます。●六歳。あっちの小さな子は春香、まだ●三歳です。五日前に入院して……わたしは、あなたと同じでバージンだったの。だけど、牝穴もケツ穴もクチマ●コも犯されて、性感まで開発されちゃったわ」

「……………！」

シオリさん、呆然とわたしを見つめて。

「いやあああっ！ 狂ってる！ 治療が必要なのは、あなたたちのほうよ！」

すごい。カンダとタナカを振りとばして、階段に向かって駆け出した。

でも、行き止まり。わたしたちが出入りするときは開けっ放しになってたから気にしてなかったけど、階段へ通じる廊下は扉で仕切られている。その扉は施錠されてるのか手で開けられるのか知らないけれど、自動にはなっていない。後ろ手錠を掛けられているシオリさんには開けられない。

「開けて！ 出してよ！ みんな狂ってる！」

ドシンドシンと扉に体当たりしてるところを、カンダが羽交い絞めにして。

タナカが、胸ポケットに差している太いペンのような物をシオリさんの首筋に当てると……十秒もしないうちに、静かになった。だけでなく、くてっと全身から力が抜けた。

「チッ……」

タナカが舌打ちした。



「簡易拘束のままで椅子に保定して、オリエンテーションビデオをエンドレスにしておけ」

ナカノがカンダを手伝って、いちばん奥の中央の独房にシオリさんを入れた。

「せっかくの実験を台無しにしてくれたな」

タナカがわたしに向き直って、サディストの嗤いを投げかけた。

「電パチもインジェクションも無しで初期設定するつもりが、おまえのおかげでペアだ」

言ってる意味はわからないけど、私が話しかけたせいで、ますますシオリさんが狂乱したと決めつけている。

「申し訳ありません。なにも知らなかったんです」

モップの柄で肛門をこじられながら膝を突いて、上体を前に倒した。バランスがとれなくて、おでこが床にぶつかったけど、土下座の姿勢にはなった。

タナカがわたしを懲罰にかける気満々なのは、わかっている。すこしでも軽くしてもらい

たいという一一卑屈さが、我ながら惨め。

「おまえの治療内容は、院長と相談してきめる。今夜のリハビリを楽しみにしている」

ドスンと背中を踏まれた。

「ぐうう……いぎゃあっ……！」

踏んづけた脚に体重を乗せて身体を浮かしたんだろう。すごい力でモップを蹴られて、わたしは絶叫した。

「いつまでもサボってないで、掃除を続けろ」

「はいい……」

返事はしたけど。激痛の塊りが肛門に居座って、わたしの身体を動かしてくれない。それでも一一自分でモップをこねくりながら、上体を起こして、右膝を立てて。右足を踏ん張って。ちょっと動いては止まって息を吐いて吸って、またちょっと動いては一一を何度も繰り返して、なんとか立ち上がった。

掃除が終わったら、また独房に戻されて夕食まで待機。

わたしは部屋を替えられた。これまでは三

つ横にならんだ中央で手前から二つ目、彩子さんの奥だったけど、右端のいちばん手前に移された。彩子さんとは通路を隔てて向かい合ってる。鉄格子で仕切られた向こう側は春香ちゃん。

そして里菜さんが、彩子さんを挟んで反対側の独房へ移された。

つまり、シオリさんだけが奥のほうへ隔離された形になる。

これまでの経過から推理すると――シオリさんは特別扱いみたい。それはきつと、特別にひどいことをされるって意味なんだろう。

夕食の時間になって。シオリさんは拘束衣だけを着せられて、独房から引き出された。ここの拘束衣にはズボンなんかない。腰から下は――股間をとおる一本のベルトだけが、剃毛されたばかりの性器に食い込んでいる。そして、先端が袋になってる袖はもちろん(?)後ろにまわされてる。

シオリさんがおとなしいのは、諦めたからじゃない。無駄吠え防止の電撃首輪を着けられているから。

食堂のテーブルに就いてる男性は十一人。院長とスタッフと、ボランティアの六人と。お昼まではいたVIPの姿が見えない。ヘリコプターで帰ったんだろう。

男性が多いので、お昼とは逆に、シオリさんを除く八人がテーブルの下にはべった。でも、ナースさんと患者とは同格じゃない。ナースさんは、シースルーの超ミニだけどナース服を着てるし、カップレスのブラとGストリングスも身に着けている。患者は背中割れたスモックで四つん這いになると見苦しいからという理由で、全裸。

この場で、乳房も性器も露出していないマゾ牝奴隷は、シオリさんだけ。彼女は――患者用のテーブルにぽつんと座って、ペットフードには目もくれず、わたしたちを見つめて（にらみつけて）いる。

一樹くんとナースさんたちは、床に放られた餌をふつうに犬食いしてる。まあね、いちばん若いアイコさんだって、わたしとひとまわり違うんだもの。小母さんよりは若い子を弄ったほうがおもしろいよね。

ということで、入院患者——わたしと春香ちゃんと里菜さんと彩子さんが、等間隔でテーブルを囲んで。

彩子さんは、もっぱら犬芸。

「オアズケ」

四つん這いでお尻を床につけて。口を開けて舌を垂らして。

「はっ、はっ、はっ……」

けっこう、なりきってる。入院はわたしと四日しか違わない。わたしの目からも、まだまだ反抗的に見えるけれど。あれにもこれにも逆らってちゃ、懲罰はもちろんだけど精神的にも参ってしまう。食餌や芸は痛くないし、それほどの屈辱でもない。

「チンチン」

目の前に肉片をかざされて、床から前足を浮かせて上体を起こす。

「オアズケ」

その姿勢を保って肉片を見上げて。

「ヨシ」

ぐっと伸びあがって、ぱくっと啜えた。そのまま咀嚼し始めたら。

「空中で餌を食べる犬はいない」

ハヤシにたしなめられて、あわてて四つん這いに戻った。

抜群に若い（幼い）春香ちゃんは、みんなの人気者。

「春香、こっちおいで」

ボランディアのひとりが、椅子を引いて腿を叩くと。

「はあい」

そこにちょこんと乗っかって。

ぶちゅううう。ディープキス。じゃなくて、口移し。

春香ちゃんは、それを呑み込んでから。

「おいしかったです」

お礼を言ってから、その人の足元に四つん這い。すると、別の人から声がかかって、トコトコ牝犬歩きで移動。

そして、わたしは。なんだかんだ言葉を交わしてるうちに、里菜さんとは仲良くなって。変な意味じゃないのに、スタッフは変な意味に解釈して、ボランティアをけしかける。

「里菜、メイ。ゴロン、マンマン」

自分でマングリ返し。そこに剥いたゆで卵をすっぽり埋め込まれて。

「シクスティナイン、モグモグ」

そんな命令は無い！ 人間の頭で考えて、忠実な犬に戻って、人形の心で実行。

里菜さんが逆さまにおおいかぶさってきて。わたしも里菜さんの股間に口を押しつける。

「それじゃ見えない。ゴロンだ、ゴロン」

寝返りを打って横向きになって。互いに牝穴をむさぼっているところを見てもらう。

ずじゅうううう……思いっきり吸ったんだ

けど。ゆで卵は、膣に完全に潜り込んで、  
まったく出てこない。

ずちゅちゅちゅうううう！

あ……ぽこっと飛び出てきた。のを、口に  
頬張った。

ちゅぶぶぶぶううう……

里菜さんは、まだ続けてる。のを、中断し  
た。

「下腹にうんと力を入れたり緩めたりしてみ  
て」

あ、そうか。わたしが吸い出したんじゃな  
くて、里菜さんが押し出してくれたんだ。

だけど、非処女歴四日目のわたしに、そん  
なことできるかな。いや、経験値なら、ふつ  
うの女の子の四年分以上だ！

とりあえず、ゆで卵をもぐもぐごっくん、  
してから。

「うんっ……うんっ……」

「違う。腹筋じゃなくて、もっと下」

て、どうすればいいんだろ。



「んっ……んんっ……」

気持ちの上では、膣の奥に力を入れてる。でも、出てくる気配はない。

「もういっぺん。あたいがお腹を押すから、そのタイミングで気張って」

犬がしゃべるんじゃないと、叱られると思ったけど、おとがめ無し。牝犬同士のコミュニケーションとして見逃してくれてる？

ぐうっと下腹部（ていうか、膣の真上）を押されて、わたしもぐっと力を入れて――すぽっとゆで卵が飛びだした。のは――膣なんて鈍感だし、ゆで卵は軟らかいし、凶悪ディルドに比べたら直径は小さいし――かろうじてわかった。

つぎにもらった餌は、フランスパン。これは簡単だったけど、パンの縁がこすれて、すこし痛かった。

それも食べ終わったら、牝犬座りに戻って待機。

「芽衣、チンチン」

上体を起こしたら、ぶちゅううと口移し。

「モグモグ」

あ、そういうつもりなんだろうと察して。

ゴックンはしない。

「里菜にブチュウ」

やっぱり。ちょっぴり、胸が切なくなった。

里菜さんとの初めてのキスだもの。あ、変な意味じゃない（と、思うけど）。同病相哀れむって感傷かな。それとも、虐げられた者同士で傷を舐め合うみたいな？

里菜さんが四つん這いのまま顔を寄せてきたので、わたしも四つん這いで向き合って。顔を互いにかしげながらキスして口移し。

そして、今度は里菜さんと役目を交替。

肉の味のするグチャグチャとか、サラダっぽいドロドロとかを何度か食べさせ合って。

ボランティアの人たちは、じきに飽きて。

最後は、スタッフが厨房から太い（といっても、せいぜい四センチかな）ソーセージを二本持ってきて。互いに向かい合って脚と脚

を交差させる松葉崩しって体位で、牝穴同士、ケツ穴同士で挿入。そんなにきつくはないし、ふにゃつとしてるし、凸凹とかもないから、ちっとも逝けなかった。

しらせながら腰を動かし続けて、ふっと患者テーブルに目をやると。シオリさん、テーブルに突っ伏して声も無く泣きじゃくってた。

だいじょうぶだよ、すぐに慣れるから。わたしだって、五日前は驚天動地で呆然自失だったのに、今では直径四センチのソーセージを物足りなく思いながら、大勢の男性にレズを見物されて、余裕綽々なもの。

なんてのは、夜間リハビリが始まるまでだった。

夕食後の短い休憩を挟んで、全員がリハビリルームに集合。

シオリさんは抵抗を続けてるので、嚴重拘束（つまり緊縛）されてボールギャグまで噛まされて、独房から引きずり出された。

もちろん、わたしたちは命じられるままに露出スモックも脱いで、乳房にカタカナで名前と年齢とを書かれて、おとなしく四階へ上がった。こういうのを、「従容として」って形容するんだっけ。

乳房に名前と年齢は、わたしたちと一緒に。というか、ナースさんが元祖だけど。

タナカ、ナカノ、ハヤシ、カンダの四人は、青色のツナギ服。白衣の院長も、さすがにズボンとシャツを着用している。

そして六人のボランティアたちは、思い思いの服装。裸にバスローブなんてお行儀の悪い人はいないけれど、まさかスーツを着てる人もいない。

初日は見学って決まってるのかな。シオリさんは後ろ手で胡坐縛りにされて三十度くらいの前傾姿勢で固定されて、壁に立てかけられている。ので、股間は丸見え。お昼にあった飾りも剃られて、じゅうぶんに発達した小淫唇までぱっくり開いてるのがよくわかる。

その処置が終わって、ボランティアの人たちがたっぷり見学してから。最初にわたしが名指しされた。

「麻衣。おまえはシオリの治療を妨害するという、厳罰に値する罪を犯した」

院長の言葉を聞いて、入院歴の長い里菜さんと一樹くんが、はっと息を呑んだ（その音が聞こえた）。重罰は懲罰よりも厳しいけれど、厳罰はその上なのかもしれない。極刑よりは下だろう（と、思いたい）。

「芽衣には、翌朝までの揺り木馬を課す。最初の三時間は十キロの錘とワニグチクリップ電撃を追加する」

「そんな……」

つぶやいたのは、里菜さん。わたしは、院長が下した宣告を完全には理解できていないけれど。木馬というのは三角木馬だろうし、ワニグチクリップがどこに使われるかも想像はつく。

「つぎに里菜。お前は夕食のときに食材を使

って芽衣とレズ行為に耽っていたな。食べ物を粗末にするというのも間違った行動だ。懲罰として、スクワットだ。百回をワンセットで逝くまで繰り返せ」

ソーセージで松葉崩しをしたのは、ポランティアの命令なのに。その場ではなにも言わなかったのに。つまりは、わたしたちを虐める口実なんだ。

「これについては芽衣も同罪だ。五百ミリリットルの浣腸で一時間放置だが――木馬に乗せていては、アヌス栓を抜いてやれないから、結果的には翌朝までになるな」

五百ミリリットルなら、水浣腸よりは少ない。でも、浣腸液は水よりもずっと効き目が強い。浣腸されてアヌス栓もされて、拘束放置されてる患者のビデオもみたことがある。三十分もしないうちに泣き叫びだした。

「どうだ、里菜？ おまえが身替りになってやってもいいぞ」

「芽衣ちゃんの身替りになります」

里菜さんは即答。

「身替りを志願したら、罰が重くなるのはわかっているな？ 五百ミリで三時間だ」

「はい、お願いします」

「里菜さん……ありがとう」

自分への罰は自分で引き受けるとは、どうしても言えなかった。里菜さんが迷うことなく引き受けてくれたのは、それだけわたしへの罰が厳しいからだ。

「彩子と春香は、ボランティアの皆さんと集団遊戯だ」

「はあい♡」

春香ちゃんが嬉々としてお返事。二人で六人か。穴の数は足りてる。

「最初は鞭打ち我慢比べ。先に降参したほうが煙草責めだ」

「……はあい」

春香ちゃん、しゅんとなった。

「それから、射撃大会。これはボランティアの競技だ。勝った者から順番に担当患者を指

名できる」

彩子さんには悪いけど、春香ちゃんに指名が集中するのはわかりきってるものね。

「そして、最後が春香の大好きな穴埋め棒倒しだ。全員がED薬を服用しているから、存分に逝き狂えるぞ」

「はあい！」

この淫乱ロリビッチめ。

「最後に一樹。ひさしぶりに、わしとタナカで相手をしてやる。ちょっと厳しいぞ」

「はい、うんと厳しくしてください」

というわけで。

わたしへの厳罰から処刑開始。全員が（ナスさんたちまで）、わたしのまわりに集まった。

まずは、ハヤシの手で高手小手に厳重に緊縛されて。胸を締めつけられると、頭にぼうっと霧がかかってきた。

でも——三角木馬がリハビリルームの片隅から引き出されて、集団遊戯の妨げにならな



い位置へ据えられて、その前に立たされると。  
一気に恐怖のどん底に突き落とされた。

これまでアダルトサイトで見たことのある  
三角木馬って、厳密には上辺が一センチかそ  
こらの台形だった。それが丸められてるのも  
あった。ところが、これはほんとうに三角形。  
先端が尖ってる。しかも、直角ではなくて正  
三角形。こんなのに乗せられたら、裂けちゃ  
……わないように一応は配慮されているんだ  
ろうけど。

そして、院長が言ってたように、これは揺  
り木馬になってる。木馬の胴体から伸びた四  
本の脚は、浅い弓形のソリに乗っている。乗  
ってるところを揺すられたら……背筋を悪寒  
が走った。

階段のようになってる踏み台が木馬の横に  
置かれた。四段だけど、わたしにとっては十  
三階段。

「乗れ」

簡潔にして残酷な命令。わたしは膝を震わ

せながら踏み台を上がって、転ばないように注意しながら片脚を上げて木馬の背中をまたいだ。

反対側にカンダが立って、足首を支えてくれた。そのまま下へ引っ張られる。院長が横から手を差し入れて、小淫唇を左右にくっつけて。

わたしの割れ目は、三角木馬の尖った部分を正確に啞え込んだ。

「つうう……」

まだ踏み台に体重を残しているのに、刃物で切られるような鋭い痛みが股間を貫いた。

げしっと踏み台を蹴りはずされると同時に、カンダの手もはなれた。

「がぎゃああああっ……！」

この五日間で味わわれたどんな激痛よりも激しくて鋭い超絶な激痛が、脳天まで突き抜けた。おへそのあたりまで、まっぷたつに切り裂かれたような……錯覚だった。

「はあ、はあ……」

大きく口を開けて喘いでるわたし。じわあっと全身から脂汗がにじみ出る。こんなのでひと晩放置されたら、死んでしまう。

だけど、厳罰は「こんなの」ではすまなかった。三角木馬の本体は一辺が三十センチしかない。だから、両足首を縄で連結できる。そこからコンクリートブロックを吊るされた。「ぎいいいいい……」

わたしの体重は五十一キログラム。そこに十キログラムが加わった。激痛は二割増しどころか二倍になった感じ。

「これは拷問器具ではなく、医療目的だから、患者の最低限の安全は確保するよう努力はしている」

保証はしてくれないんだ。

「わずかに先端を丸めてあるから、身体を動かさなければ、牝穴が傷つくことはない」

嘘。絶対に尖ってる。丸めてるとしても、顕微鏡レベルだ。

「木馬が揺れると痛みも揺れるが……」

木馬の長さは二メートルもある。だから、端を軽く押さえたただけで前へ傾く。

「痛い、痛い痛い、痛い……」

それまでは割れ目の下側、会淫部に近いあたりが激痛の中心だったのに、クリトリスのすぐ近くまで移動した。

「おとなしく揺られていることを、強く推奨するぞ」

院長が木馬から手をはなした。

音もなく木馬が後ろへ揺れる。

「ぎゃああああああああっ！」

激痛が揺れるとか移動するとかじゃない。長い刃物で切りつけられてる。

「つぎは、これだ」

サヨコさんが小さなワゴンを院長の前に置いた。赤い電線がつながったワニグチクリップが三つ載せられている。黒い電線がつながった、もっと大きなクリップが二個と、細い金属の環っかもふたつ。

その横に、小さな液晶ディスプレイとタッチ

キーの並んだ小さな箱。

院長とタナカが金属の環を持って、わたしの左右に立った。

「……………」

金属の環が胸に押しつけられて、その中に乳房を引っ張り出された。根元が締めつけられて、ちょっとだけ痛い。

そして、ワニグチクリップ。

理科の実験で誤って指を挟んだときは、そんなに痛くなかった。里菜さんがクリトリスの「中身」を噛まれたときも、悲鳴はあげなかった。でも、いざ自分の敏感なところに近づけられると、やっぱり怖い。

わたしはぎゅっと目をつむって息を止めて、その瞬間を待った。

ワニグチクリップの威力は、予想していたより無限にすさまじかった。

無数の針に貫かれた（そんな経験はないけれど）ような鋭く激烈な痛みが乳首で爆発した！ その衝撃が脳天まで突き抜けて、視界

が赤一色になって、白熱した星が飛び散る。

「ぎゃばわゝあゝあゝあゝあゝっ……！」

「ぎゃばわゝあゝあゝあゝあゝっ……！」

わざと左右のタイミングをずらして、二回の絶叫をわたしから絞り出すサディストたち。

「はあ、はあ……はあ、はあ……」

乳首に咬みついたワニグチクリップは、絶え間なく激痛を送りつけてくる。わたしは口をだらしなく開けて喘ぎながら、もう全身脂汗でぐしょぐしょ。

「さて、いよいよお待ちかねの箇所だぞ」

待ってない！ やめてほしい！

三角木馬の稜線に割り広げられてる小淫唇が引き伸ばされて、大きなクリップで挟まれた。これは、あんまり痛くない。といっても、五日前のわたしだったら悲鳴をあげてるレベルだけど。

院長の手でクリトリスが引き伸ばされて、包皮が剥き下げられた。それ自体は、ちょっと快感。

赤い電線につながれたワニグチクリップが、くわっと口を開けて正面からクリトリスに迫った。

「いくぞ、覚悟はいいな？」

「……………」

立派なマゾ牝奴隷なら「はい、お願いします」とか言うんだらうけど、わたしは拒否の懇願を口にしないのが限度。

ワニグチクリップが静かに閉じられて……  
「がうゝああゝ……びぎいゝいゝっ！！」

クリトリスが鋭い激痛の塊りと化して、反射的に腰を引いたか跳ねたかしたんだらう、割れ目の奥まで切り裂かれたような激痛が股間を貫いた。

「身体を動かすと危ないと忠告したはずだぞ」

わかってる！ でも、無理！

「はあ、はあ……はあ、はあ、はあ……」

木馬に切り裂かれた激甚な超激痛は、じきにふつうの激痛まで治まったけれど、ワニグチクリップに咬み付かれたクリトリスは、木

馬の激痛を上まわる激痛の塊りと化して、しかも燃えるように熱い。

無様に口を開けて喘ぎ続けるわたし。もう、全身が脂汗でびっしょり。顔は涙と鼻水でぐしょぐしょ。

「なぜ、プラスとマイナスの電極を近づけているかわかるか？」

いきなり、院長が訊ねた。たぶん、わたしにだろう。

「……わかりません」

「たとえば乳首からメシベに通電したとすると、その途中には心臓がある。二十ミリアンペアも流すと、心室細動を引き起こす危険性がある。一方、じゅうぶんな痛みを与えるには十五ミリアンペア以上が必要だ。感受性の固体差を考慮すると、五ミリアンペアではマージンが少なすぎる」

だから、乳首から乳房の付け根まで、クリトリスから小淫唇までと、通電範囲を局限するんだそう。心臓麻痺の心配なく、じゅう



にぶんどころかにじゅうぶん以上の激痛を味わわせてもらえるという、ありがたくて泣き喚きたくなる配慮だ。

「もちろん、万一にそなえてA E Dは置いてあるがな」

院長がワゴンの上の箱をいじる。

「通電時間はミニマムの五秒で赦してやる。通電間隔は五分から十分の間でランダム。三点別々だが、少なくとも一時間に一回は同時に通電してやる」

なにも知らされないのも怖いけど、こんなふうに予告されるのも不気味だ。

「では、明日の起床時間まで、おのれのでかした罪の重さを身体で思い知れ」

カチッとも音はしなかった。

ワニグチクリップとは異質の、ビリビリ震えるような、「凄まじい」を百個重ねても足りない激痛が乳房とクリトリスを貫いた。

「ぎゃっ……………！！」

息が詰まって、悲鳴すら吐き出せない。全

身が痙攣して、三角木馬の稜線がさらに股間に切りこんでくる。

もしも、今すぐ赦してもらえるんだったら——従順で忠実なマゾ牝奴隷として、柴田さんにでも院長にでも誰にでも、一生を捧げる。おしっこだって飲む。うんちだって食べる。犬と交尾しろと命じられたら、ちゃんとフェラチオして勃たせてあげてから四つん這いになってお尻を突き出す。

「なんでもします……赦してください！」

あ、しゃべれた。五秒の通電が終わったんだ。

そして。わたしの懇願に耳を傾けてくれる人は、誰もいなくなっていた。

すこしはなれた場所で、里菜さんの治療の準備が始まっている。

四つん這いになった里菜さんにアイコさんが大きな注射器（じゃなくて浣腸器）で五百ミリリットルを注入して。カズコさんが真っ黒なアヌス栓を持って床に膝をついた。

わたしは自分の激痛も一瞬忘れて、それを挿入されたときの里菜さんの苦痛を想像した。

アヌス栓は根元で直径五センチくらい、途中はもっと膨らんで、(会淫部の形状に合わせて)湾曲した土台に植えつけられたドングリ形をしてる。しかも、そのドングリは縦に割れている。カズコさんが手をはなすと、四枚の花びらみたいに外へ開いた。

ということは。肛門に挿入されたら中で開いて――全体が軟らかい樹脂製らしいから、外から引っ張れば抜けると思うけど、排泄の圧力がかかると開いた部分が腸壁に押しつけられて、絶対に抜けない。

処置が終わると、スクワットをする場所へ移動。ボランティアとスタッフもぞろぞろ。

院長が「逝くまで繰り返せ」なんて言ってたから想像はついてたけど。腰の高さくらいのポールの先に長いディルドが直立してる。

根元に刀の鍔みたいのがついてるから、思いきりスクワットしても膣を突き破られるこ

とはない。その鏝からは、二股に分かれた小枝みたいな物が上向きに突き出ている。これって、臆逝きできない子のための補助装置、クリトリス刺激用じゃないかな。

ポールの台からは細いゴム管が延びていて、その先には、なんて名前だっけ、小さなラグビーボールみたいなやつ。それで空気を送るとディルドの先がどンドン膨らむ。

「どれだけ激しくスクワットしても、抜け落ちることはありません」

院長がボランティアの人たちに説明している。

「支持棒もスプリングを仕込んだ三段伸縮になっています」

ディルドをつかんで押し下げると、台にめりこんだみたいにポールが縮まった。

「ストロークを自動計測していますから、手抜きをすると……どうなるのだったかな、里菜？」

里菜さんが答えるより先に、わたしが叫ん

でいた。

「ぎゃばわっっ……かはっ！！」

クリトリスに通電された。上体が反りかえって、股間に稜線が食い込む。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

かろうじて耐えられるレベルまで股間の激痛が緩和したときには、里菜さんの説明は終わっていた。

里菜さん、肩の高さで握りこぶしを作って、がに股になって、カズコさんが押し下げてるディルドをまたいで立つ。力を緩めるとスタンドが伸びて、ディルドの先端が割れ目に隠れた。

カズコさんが台についでる小さなメーターを見ながらディルドのストッパーを膨らませて。

わたしが予想してたとおり、鏝から突き出た二股の小枝でクリトリスを挟んだ。

「スクワット、始め」

院長の号令で、里菜さんがぐうっと深く腰

を沈める。膝を直角まで曲げて、またまっすぐに伸ばす。ポールが斜めに傾いて、腰の前後の動きを追いかける。

バネの力がうまく調整されてるから、腰を完全に落とさないと、ディルドは根元まで挿入されない。抜くときも同じ。ということは、ふつうの騎乗位と同じ早さでスクワットしないとアクメは難しい。

それとも。二股の小枝にクリトリス（の根元）をこすられるから、騎乗位より刺激は強いかな。

それから十分くらいは、残された二人とナスさんたちは手持無沙汰。ボランティアの人たちは思い思いに、わたしと里菜さんの治療を見物してた。

里菜さんは見られて興奮するかもしれない。彼女に露出趣味があるとかじゃなくて、わたしよりは余裕があるって意味。

わたしは、見物されようと無視放置されようと関係ない。耐えられない激痛にさいなま

れながら、身体をピクツとも動かさないことに全神経を集中してる。

それでも、三回通電されて、三回とも股間をいっそう傷つけられた。

合計四回の通電が終わったところで。

「では、彩子と春香の治療を始めましょう」

院長が六人をうながした。

天井から垂れた鎖と床の鎖とで、春香ちゃんと彩子さんがX字形に空中で磔にされた。足は床についている。

「三組に分かれてジャンケンをしてください。勝った人が彩子、負けた人には春香を担当してもらいます。各チーム一名ずつが、同時に同じ部位を鞭打ちます。悲鳴は存分に堪能してくださいってかまいませんが『降参』と言ったほうが負けです。もちろん、皆さんの勝ち負けではありません」

「手加減はしなくていいのかね？」

「皆さんの判断にお任せします。次の射撃大会にそなえて体力を温存させてもよろしいで

す。ただし、傷が筋肉にまで達するとか出血がおびただしいときは、自動的にその患者の勝ちにします」

これって、あおってるんだらうか、抑制してるんだらうか。わたしが鞭打たれたときは、血がちょっとにじんだだけだった。彩子さんのときも、肌は裂けても表面だけだった。

いよいよ鞭打ちが始まる直前に。

「ぎゃびゃあゝっ……………！！」

三か所同時に通電されて、わたしは意識を失った。

そして、つぎの通電のショックで意識を取り戻した。といっても、頭が朦朧としてる。そのせいなのか、痛覚が麻痺したのか。股間の凄絶な激痛は、喘ぎも呻きもせずにいられるくらいにまで落ち着いてきた。

バシッ……！

「いやあーっ！」

ビシッ……！

「痛いいいいい！」



鞭打ちが続いてる。鞭の音が鈍いのに、彩子さんも春香ちゃんも大きな悲鳴をあげている。

わたしが今度はクリトリスだけに電撃を受けて、後ろへ倒れそうなくらいのけぞって、二人の十倍以上の大声で叫んで――その直後に二人の勝負がついた。

「降参するわよ！ どうせショウヘイさんには捨てられたんだもの。肌を焼かれようと性器にケロイドが残ろうと、もう、どうでもいい！」

勝った春香ちゃんだけが大の字礫から解放されて、彩子さんはそのままの姿で罰ゲームが始まった。穴の開いてない大きなボールギャグを頬張らされて、彩子さんを担当したボランティアのうち二人が両側から――火の点いた煙草を鼻の穴にねじ入れた。

なあんだ。煙草責めっていうから、初日にはアイコさんにクリトリスに据えられたお灸の痕を見せられてたせいもあって、わたしも

彩子さんと同じことを予想してた。

彩子さん、ぎりぎりまで息を止めてたけど。ぼうっとタバコの火が輝いて、しばらくして。「ぐふっ……ぐふふっ……」

激しく咳込んでるんだらうけど、ボールギャグで口をふさがれてる。頭を押さえられるから、逃れようがない。鞭打たれてたときよりも激しく身をよじってる。

だけど、しょせんは煙草だよ。ふだんから吸ってる人なら平気なんだろうな。あ、でも……吸い込む煙と空気には酸素が少ない。窒息責めも兼ねてる。

煙草はたちまち短くなって。それで終わらずに二本目がねじ込まれた。

罰ゲームが終わって、腕を吊っていた鎖が緩められると、彩子さんはくっつと床に倒れた。煙草を初めて吸うと頭がクラクラするっていうから、それだよ。わたしなんか、近くで煙草を吸われると、それだけで気分が悪くなって頭もぼわんとしちゃう。

彩子さんが正気づくまで、三十分の休憩。  
といっても、彩子さんは無反応のまま、二人  
のボランティアにあちこち弄られてた。春香  
ちゃんには四人がかり。こっちは騒々しい。

「やだあ……くすぐったいよ」

「痛い！ 鞭の痕をつねらないで……ください。  
い。すごく痛いんです」

「ああん……お豆ちゃん、せつないよう」

その間にわたしの絶叫が十回ほどかぶさつ  
た。通電間隔は五分から十分の間でランダム  
っていうけど、それは一か所ずつの話。三分  
に一回は、どこかしらに電撃を受ける計算に  
なる。

里菜さんは百本のスクワットではアクメま  
で達せなかった。浣腸の苦しみのせいばかり  
じゃないと思う。だって、里菜さんは肩の高  
さで握ったこぶしを、そのままにした。両  
手を使うなどは言われてないはず。本気でア  
クメをきめるつもりなら、乳首を弄るとか、  
二股の棒に挟まれてるクリトリスの先っぽを

刺激するとか。

もしかすると。里菜さん、体力に自信があるのかもしれない。スクワットの刺激で浣腸の苦しみをまぎらわせてるのかも。

里菜さんが二回目のスクワットを始めると同時に、春香ちゃんと彩子さんへの嫌虐症治療の第二幕が上がった。

二柱の礫台が並べられて、ふたりはそれぞれの根元の部分に立たされ、脚を開いて柱を後ろ手に抱える形で縛られた。そして、目隠しをされた。

六人がライフル銃（もちろんエアガン）を持って並ぶと、今にも銃殺が始まりそうな構図。ふたりの横に立てられたマイクスタンドと、その上のデジタル表示が、シュール。

「標的は自由に選んでください。弾はひとり三十発ずつ。悲鳴の大きさが得点です。三十発の合計ではなく、最大音量ですよ」

的から五メートルはなれたところに、テープで線が引かれた。二人のボランティアが線

の後ろに立って銃をかまえた。

バシュッ！

「きゃあっ！」

弾は正確にクリトリスを直撃。デジタル表示は92.5。

バシュッ！

「いたいっ！」

春香ちゃんもクリトリスを撃たれたけど、悲鳴はずっとかわいらしくて85.5。

六人が一発ずつ撃って、すべてクリトリスに命中。彩子さんの悲鳴は95.8が最大。春香ちゃんは一発目の85.5が最大だった。

二発目は最初と組み合わせが変わった。

バシュッ！

「きゃああっ！」

彩子さんは左の乳首を撃たれて、96.9の新記録。痛みよりは驚きの悲鳴だと思う。目隠しをされてるから、どこを狙われるかわからない。でも、最大の急所を狙われると思いい込んで、それが裏切られた。

バシユッ！

「きゃああっ！」

春香ちゃんの前に立ってた人も彩子さんを狙って、右の乳首で98.3。これも驚きの悲鳴。

にしても、命中精度がすごい。遊園地のコルク鉄砲とは比較にならない。

つぎの二人がラインに立って。

「よーい、てっ」

ひとりが小声でささやくと同時に。

バシユシユッ！

「きゃああああっ！」

クリトリスと乳首を同時に撃たれて、彩子さんは大台越えの101.3。

「ひどい！ どうして、わたしばかり狙うんですか！？」

うわあ。99.2の抗議だ。

あ、もしかして。春香ちゃんは苦痛系には弱かったはず。嫌虐症というより嫌痛症。この五日間で治療の成果は出てるんだろうけど。

大声を出したら、いっそう狙われると予測して、悲鳴を我慢してたのかも。だとすると、なかなかの策士。そして仲間を見捨てるエゴイスト。なんて考えちゃいけない。こんな馬鹿げた苦痛を分かち合う義理も必要も無い。

のだけれど。わたしへの浣腸の身替りを(三倍返しにされてまで)引き受けてくれた里菜さんと比べてしまう。

「ところで、得点はどうなるね？」

彩子さんの抗議は無視される。

「弾は二発。したがって音圧が二倍になったと考えれば、一発当たりでは6.02デシベルを引いて、得点は二人とも95.3ですね」

チンプンカンプンなのは、わたしだけじゃない。ボランティアさんたちの中でも、うなずいたのは一人だけ。でも、誰も文句は言わない。

「ああああっ……逝く、逝っちゃう！」

75.3——違う。

すっかり忘れられていた里菜さんが、アク

メにさしかかっている。今度は本気だ。

両手で乳房を揉んで乳首を転がしながら、腰を突き出してクリトリスをこすりつけてる。

「駄目……来る！ おっきいのが来るう！」

スクワットのピッチがさらに速くなって。

「うあああああああああ……」

前に倒れかけて、ディルドに支えられて宙吊り。でも、アクメの余韻に浸る贅沢は許されない。

「ぐううう……」

両手でお腹を押さえて苦しみ出した。そうか。浣腸の苦しさがつのってきて、これ以上ひどくなったらアクメれないと判断して、逝くことにしたんだ。

ナカノとカンダが、いつものように二の腕と乳房をつかんで、里菜さんをディルドから解放した。そして、床に転がして放置。

「競技を続けましょうよ」

ボランティアのひとりが、みんなをうながした。



「タイムリミットまで、まだ一時間半あります。ケリをつけてから鑑賞しても遅くはないでしょう」

ということで、射撃大会の続行なんだけど。六人が輪になって、なにかヒソヒソ。

え……？

六人全員が一斉に銃を構えた。前後二列になって、前の方は二人が片膝立ち。ひとりが床に伏せてる。

「よーい、てっ」

バシユシユツ、バシユツ！

「ぎゃあゝああああっ！！」

凄絶な悲鳴をあげたのは、春香ちゃん。乳首もクリトリスも滅多撃ちにされて、牝穴まで弾を撃ち込まれた。

110.8。

「ひどいよ……こんなのインチキだよ」

春香ちゃん、83.5～87.6で泣きじやくり始めた。

「六倍は15.56だから、得点は94.9。

あまり賢明な作戦ではないですね」

院長のジャッジとアドバイス。

「ですね」

小声で合図してた人がうなずいた。

「では、ショットガンに続いてマシンガンと  
いきましょう」

今度は六人全員が横一列。銃口は全部が彩  
子さんに向けられてる。

合図無しで。

バシュッ！

「きゃあ！？」

95. 3。

バシュッ！

「いやあ！」

92. 6。

バシュッ！

「ぎひいっ！」

97. 6。

一秒間隔で六連発。

「がはあっ……」

これは、わたし。

このとき初めて。ピチッと股間に衝撃が走った。おそろおそろ見下ろすと、割れ目に血がにじみ始めていた。ほんとうに……切れちゃったんだ。

苦痛ではなくて悲しみで、新たな涙が絞り出される。

「うううう、ううう……」

喉が痛くて、泣きじゃくることすら、ままならない。

——そうして、射撃大会も終わって。

春香ちゃんと彩子さんは、傷の治療のために、カズコさんに付き添われて、いったん下の階へ戻された。

これまでのあれこれを考えると、カズコさんは看護師免許を持った本物らしい。本物といえば、タナカはスタッフの格好をしてるけど、医師かインターンくらいの資格を持つてると思う。

もちろん、そんなことはなんの気休めにも

ならない。いや、それどころか。医療体制が充実してるぶんだけ、ボランティアの人たちは思う存分わたしたちを虐待できるってことになるんだろうな。

ボランティアの人たちのうち、半数が私を取り囲んだ。のこりは、床で悶えている里菜さんへ。

「苦しそうだな。しかし、まだまだ注入できそうぞ」

「アナルフラワーには注入弁がありません」

院長がやんわりと拒否した——んじゃなくて。

「外から圧迫しても腸が破裂しないよう、手加減してありますから」

「あ、そういうこと」

二人がかりで里菜さんをあお向けにして手足を押さえつけて。もう一人が、お腹を踏んづけた。

「ぐううう……」

里菜さん、顔をゆがめて歯を食い縛って耐

えている。

「踏んだ感じで、圧力が高まってきたら、そこが限界ですから。それ以上は勘弁してやっ  
てください」

これは、タナカ。

「ほう……ああ、ここまでか」

「ぐべえええっ……！」

里菜さんが低い声で呻いた。

わたしは、身体を直接虐められはしなかった。乳房もクリトリスも電極でふさがってるし、牝穴もケツマ●コも木馬で責められてるから。

「そういえば、さっきからちっとも揺れていないんじゃないか？」

あたりまえ。電撃のときは仕方ないけど、あとは激痛をこらえて、とにかく身体を動かさないことだけを心がけてる。というのに。

ボランティアの一人が、木馬のソリの端を踏んづけた。

ぐうっと身体が前へ傾ぐ。

「ぎひいいいい……」

あまり痛めつけられてなかった上のほうまで稜線が食い込んできて、新しい痛みが切りつけてくる。

「いいい、いゝいゝいゝいゝっ……！」

ひどい……二人がかりで両側を踏んづけて、あとのひとは、後ろで木馬の端を持ち上げてる。三十度くらいも、身体が前へ倒れて、滑り出しそうになる。

底辺が食い込んでくる痛みをこらえて、太腿を締めつけて身体を支えた。

「それじゃ、はなすぞ。いっせーのっ」

ぐうんと身体が後ろへ向かって倒れて。

「びぎゃあああああーっ！」

太腿の力が緩んで、ずるっと身体が後ろへ滑って。

ピチチッと股間が裂ける衝撃。

「ぎひいいいい……」

わたしの絶叫に関係なく、木馬はのんびりゆうらりゆうらりと揺れて。さらにわたしの

喉から悲鳴を絞り出す。

それが終わらないうちに、右の乳首とクリトリスに電撃がきた。

「か、はっ……」

目の前が真っ赤になって白い稲妻が飛び交って、そして暗転した。

——意識を回復したとき、リハビリルームには誰もいなくなっていた。

股間の凄絶な激痛が、ごくふつうの激痛くらいまで軽くなっている。乳首とクリトリスが、ずきずき痛む。

ああ、そうか。三時間が過ぎたんだ。まだ高手小手に緊縛されて三角木馬に乗せられているけど、足首の縄はほどかれて、コンクリートブロックの錘も無くなっている。そして、乳首とクリトリスを咬むワニグチクリップも取りはずされていた。その名残の痛みだけが残っている。

「はああああああ……」

わたしは安堵の息を吐き出した。

こんな稜線の尖った三角木馬に乗せられて  
全体重を股間で支えているなんて、ふつうの  
神経なら、身の毛もよだつ拷問だろう。でも、  
十キログラムもの錘を追加されたり、敏感な  
突起をワニグチクリップに咬まれて通電され  
たり、木馬を揺すられたり——そんな地獄に  
比べたら、ぜんぜん平気。これなら朝まで耐  
えられるかもしれない。

今、何時だろう。リハビリルームには時計  
が無い。

春香ちゃんと彩子さんは、まだSEXの相  
手をさせられてるんだらうか。彩子さんはと  
もかく、春香ちゃんは喜んで張りきっておチ  
●ポ様を貪って……また、あいつらの言葉を  
使っちゃった。

もう、言葉については無駄な抵抗をやめよ  
う。おチ●ポ様、牝穴、ケツマ●コ、クチマ  
●コ、性なるお汁、牝蜜……それで、いいや。  
そうしとけば、しゃべるときにいちいち脳内  
変換しなくてすむ。



考えが変な方へ流れちゃった。

里菜さんは、どうしてるかな。穴埋め棒倒しに参加させられたのか、それとも独房で眠るのを許されたかも……

はっと、目を覚ます。もう脂汗こそ流してないけど、身体じゅうずきずき痛いのに、とろとろっと眠ってた。

それもそうだよ。縛られててろくに身動きできなかったけど、疲労はあんまりしてなくても、肉体は消耗しきってる。精神もズタボロ。どうせ、明日も虐められ………